



西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日～十月八日

持続させながらあの緊張感を

自然美に気付かず

久留米市からJR久大線に沿った国道210号を東に向かうと、間もなく右手に耳納連山が見えてきた。左手には筑後川を抱き込んで広がる筑後平野が稻を実らせている。バスは一時間ほど走って、筑後川の河原を描く尾花成春が住む福岡県浮羽郡吉井町に着いた。なだらかな山並みは、さらに東へ伸びている。

バスを降りると壮大な白壁造りの家屋や土蔵が並び、水量が豊かな小川は澄んで、底の水草が見える。こんな美しい自然の中の静かな町に生まれ育った若者が、なぜガラクタやアスファルトで汚れた絵を描いたのだろうと考えながら、稻穂のそばの道を歩いた。

「セザンヌに傾倒して、絵には精神性が必要と思っていた。そこに押し寄せてきたアンフォルメル(非定形)という時代の渦に巻き込まれ、美しいものは、けとばせと思い始めた。自然の美や偉大さに気付いてなかったのだ」。江戸時代から続く土蔵を改造したアトリエで語る。

「アホらしい集団」

尾花が油絵を始めたのは旧制中学在学中の昭和十六年。卒業後も会社勤めのかたわら、描き、二十五年から九年連続自由美術展入選。県展でも受賞を続け、二十九年には福岡県美術協会会員に推された。九州派結成の三十二年ごろは、県内では知られた画家だった。誘われて加わったものの、素人が多い集団を「論理もなくアホらしい」と思っていたという。それでも汽車を乗り継いで福岡市に出かけたのは「若い人の熱気の中で、絵を描く緊張感を持ち

続けたかったから」だった。田園地帯にはない刺激も欲しかったし、権威に対する人一倍強い反抗心も九州派の体質になじんだ。

木くずや松葉、アスファルトやペンキを用い、ランプで画面を焼いたりした。開催中の九州派展に掛かっている「黄色い風景」もそんな一点だが、泥のにおいがする色彩や質感に筑後の画家の系譜が見える。生活する土地への愛着が自然に表れたのだろうか。

メキシコの田舎で

九州派を離れたのは、九州派が解体期に入る四十年ごろだった。当時は「進む方向が定まらず、メンバーはヒステリー症状だった」と振り返る 一つのけんかをきっかけに「だらだら続けるのは性にあわん」と飛び出したものの、尾花自身にも、焦りと不安があった。刺激を失った。表現にも行きづまりを感じていた。

投げやりな気分もあって、四十年に単身、メキシコに出かけた。二年分の有給休暇をとって田舎町を歩き回った四十日間の貧乏旅行が、そのごの方向を大きく変えた。

「真実の自然の風景に初めて触れた気がした」。小村で親しくなったインディオが、卵を一個持ってきてくれた。「卵一個あれば生きてゆける。豊かになりかけた日本では忘れていたこと。自然と一緒にになって生きる人々の姿に感動した」。描かねばならぬことが見え始めていた。

帰国して、自宅から一キロほどの筑後川に行ってみた。

秋の日差しの中で、川は逆光に輝いていた。太陽が雲にかくれた。一瞬、野原が死んだよう見えた。死骸(しがい)が累々と並んでいるようだった。「初めて自然の尊厳を感じた」と言う。以来二十年、河原の草むらを描くことになる。

ひたすら筑後川を

「精神を込めなければ絵ではないと自然を無視していたが、自然を知らなかつたのだ」と今は思う。草むらの動きに自己を見ることもできるし、自然は社会の動きを反映もする。

ひたすら筑後川を描いた。淡いセピア色や灰色で描かれた枯れ草は、ある時は燃え上がる情念になり、また現代文明に侵食されたしかばねだつたりする。

この夏から百号三枚に「天」「地」「水」の連作に取りかかった。空や太陽や山、川、装飾古墳のような模様で埋まる画面のあちこちに奇妙な形の鳥が描かれている。

「こんな平野に海鳥が飛んでくるようになった。山の中にすむ鳥が下りてくる。自然破壊がなにかを変えている。ピカンのゲルニカのように、のちの人に伝えておきたい」と顔を曇らせた。

九州派は前衛美術の一つの実験だった。そこに身を置いたことのある尾花は、筑後川を死ぬまで描いたら、川は、自分はどうなるかを実験しようと思い始めている。「あの時の熱気を思い出して、緊張させながらね」

